

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2004-167370  
(P2004-167370A)

(43) 公開日 平成16年6月17日(2004.6.17)

(51) Int. Cl. <sup>7</sup>	F I	テーマコード (参考)
BO1J 35/02	BO1J 35/02	4G069
BO1J 21/18	BO1J 21/18	Z
BO1J 37/14	BO1J 37/14	
CO1B 3/04	CO1B 3/04	A

審査請求 未請求 請求項の数 3 O L (全 5 頁)

(21) 出願番号	特願2002-335975 (P2002-335975)	(71) 出願人	000004097 日本原子力研究所 千葉県柏市末広町14番1号
(22) 出願日	平成14年11月20日(2002.11.20)	(74) 代理人	100089705 弁理士 社本 一夫
		(74) 代理人	100076691 弁理士 増井 忠次
		(74) 代理人	100075270 弁理士 小林 泰
		(74) 代理人	100080137 弁理士 千葉 昭男
		(74) 代理人	100096013 弁理士 富田 博行
		(74) 代理人	100092015 弁理士 桜井 周矩

最終頁に続く

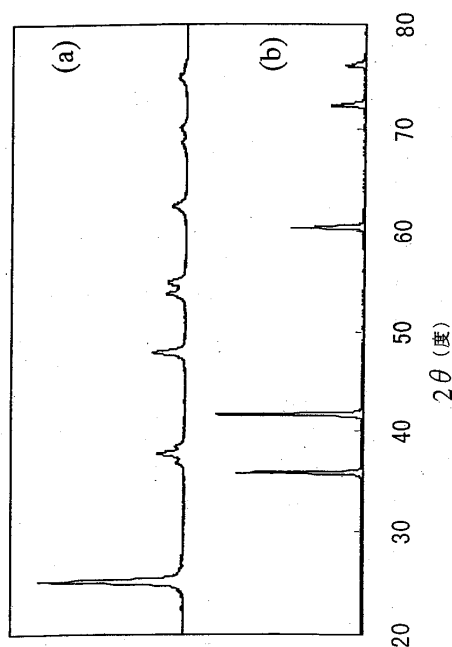
(54) 【発明の名称】 高活性光触媒炭素ドープ二酸化チタンとその作製方法

(57) 【要約】

【課題】 作製された事例のない炭素ドープされたTiO<sub>2</sub>からなる光触媒材料及びその作製法である。

【解決手段】 炭化チタンを空気もしくは酸素雰囲気中で焼成することにより高活性光触媒炭素ドープ二酸化チタンからなる光触媒材料の作製する。その炭化チタンの焼成条件により、炭化チタンからアナターゼ型又はルチル型の二酸化チタンからなる光触媒材料が作製される。

【選択図】 図1



(任意単位) 任意単位

**【特許請求の範囲】****【請求項 1】**

二酸化チタンに炭素をドーブすることによって得られる高活性光触媒炭素ドーブ二酸化チタンからなる光触媒材料。

**【請求項 2】**

炭化チタンを空気もしくは酸素雰囲気中で焼成することにより高活性光触媒炭素ドーブ二酸化チタンからなる光触媒材料の作製方法。

**【請求項 3】**

炭化チタンの焼成条件により、炭化チタンからアナターゼ型又はルチル型の炭素ドーブ二酸化チタンからなる光触媒材料が作製される請求項 2 記載の方法。

10

**【発明の詳細な説明】****【0001】****【発明の属する技術分野】**

本発明は、炭素ドーブ  $TiO_2$  光触媒材料とその作製方法に関するものである。さらに詳しくは、 $TiC$  を空気中もしくは酸素雰囲気中にて高温で焼成する事によって得られる光触媒材料とその作製方法に関するものである。

**【0002】****【従来技術】**

従来から、 $TiO_2$  は光触媒材料として様々な技術への利用が試みられてきた。現在でも、光触媒性能を向上させることを目的として、不純物を同化合物に対してドーブする研究

20

**【0003】**

最近の研究では、 $TiO_2$  に対する非金属ドーブに注目が集まっている。特開 2001-205103 では、窒素をドーブすることにより、 $TiO_2$  の光吸収帯が紫外域から可視域まで拡大し、結果として、可視光下でも光触媒性能を持つ材料の開発に成功したと報告されている。また、硫黄をドーブした場合も同様の効果が得られる（特願 2002-161069）。さらに、フッ素ドーブ  $TiO_2$  では、光応答性が向上するとともに光触媒性能が改善するといわれている。このように、 $TiO_2$  への非金属ドーブは当該物質の光触媒性能を向上させる働きを有する事が示されており、非金属元素 C に対しても同様の効果が期待できる。しかしながら、Cドーブ  $TiO_2$  が作製されたという例は存在しない。

30

**【0004】****【発明が解決しようとする課題】**

本発明は、以上の状況に基づいてなされており、作製された事例のない炭素ドーブ  $TiO_2$  の作製を可能にするものである。本発明の課題は炭素ドーブ  $TiO_2$  とその作製法を提供する事である。

**【0005】****【課題を解決するための手段】**

本発明は、上記の課題を解決するものとして、 $TiC$  を焼成して得られる光触媒材料とその作製法を提供する。詳しくは、温度 300 ~ 800 にて、空気もしくは酸素雰囲気中で  $TiC$  を焼成する製造法をその態様としている。

40

**【0006】****【発明の実施の形態】**

本発明が提供する光触媒材料は、上記のとおり、 $TiC$  を焼成することによって得られるものである。本発明での  $TiC$  の焼成方法には特に制限はなく、電気炉などにて、空気中もしくは酸素雰囲気中に行なわれる。焼成温度は 300 ~ 800 （好ましくは 350 前後）、時間は 1 ~ 200 時間（好ましくは 100 時間前後）である。

**【0007】**

本発明で用いる  $TiC$  の形状にも特に制限はないが、粉末が好ましい。粉末ならば粒径が制御されたものが市販されている。

**【0008】**

50

**【実施例】**

以下、実施例を示し、さらに本発明について詳しく説明する。

**（実施例 1）**

空気中にて 350 で 100 時間だけ、TiC 粉末（粒径：0.9 ~ 1.5 μm）を熱処理した。得られた粉末結晶と TiC 粉末結晶との X 線回折（XRD）パターンの相違を図 1 に示す。図 1 の（a）は、炭化チタン（TiC）を 350 で、100 時間熱処理して得られた粉末の XRD 測定結果であり、図 1 の（b）は、純粋な TiC の XRD 測定結果である。XRD の結果より、TiC が酸化されアナターゼ型 TiO<sub>2</sub> に変化したことが明らかになった。

**【0009】**

元素分析装置が備え付けられた走査電子顕微鏡（SEM/EDX）測定によって、純粋な TiO<sub>2</sub> と比較して、本発明により作製した TiO<sub>2</sub> には 2 ~ 3 倍の炭素が存在していることが分かった。以上の結果より、炭素ドーブアナターゼ TiO<sub>2</sub> が作製できたことが示された。

10

**【0010】**

炭素ドーブアナターゼ TiO<sub>2</sub> と純粋なアナターゼ TiO<sub>2</sub> に対する水の分解実験の結果を図 2 に示す。水の分解実験は、純水 400 ml に各々の試料（1g）を入れ、UV ランプ照射（光源：300 W の UV ランプ）中に生成される水素の量をガスクロマトグラフィによって測定することにより行った。この実験の結果より、炭素ドーブアナターゼ型 TiO<sub>2</sub> が純粋な未ドーブ TiO<sub>2</sub> よりも高い光触媒性能を持つことが明らかになった。

20

**【0011】**

図 2 の（a）は、TiC の焼成から作製された炭素ドーブアナターゼ型 TiO<sub>2</sub> の紫外光照射時間に対する水の分解によって生成する水素の生成量を示し、また、図 2 の（b）は、純粋なアナターゼ型 TiO<sub>2</sub> の紫外光照射時間に対する水の分解によって生成する水素の生成量を示している。

**【0012】****（実施例 2）**

TiC 粉末を空気中にて 800 で 2 時間の熱処理後に得られた粉末結晶は、XRD パターンよりルチル型二酸化チタンであることが明らかとなった。それに続く、試料の元素分析からも、純粋な二酸化チタンと同じルチル型の酸化チタンの作製ができたことを確認した。

30

**【0013】****【発明の効果】**

1. TiC を空気中で熱処理することによって、炭素ドーブアナターゼ型 TiO<sub>2</sub> という新しい光機能材料を創製した。

**【0014】**

2. 炭素ドーブアナターゼ型 TiO<sub>2</sub> は、従来の市販用のアナターゼ型 TiO<sub>2</sub> より単位重量当たりで高い光触媒性能を持ち、新たな高活性光触媒材料として有効である。

**【0015】**

3. TiC の焼成温度と焼成時間の変化によってルチル型とアナターゼ型酸化チタンを別々に作製することができた。

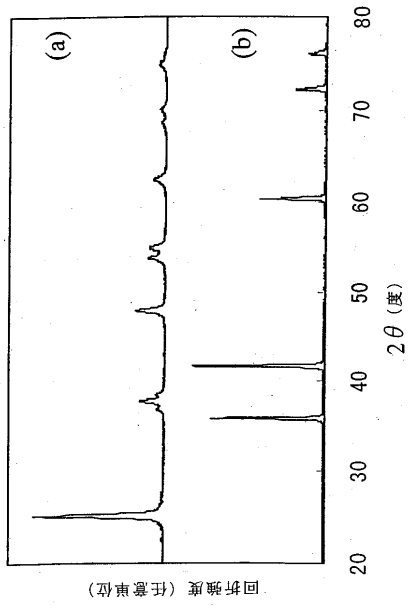
40

**【図面の簡単な説明】**

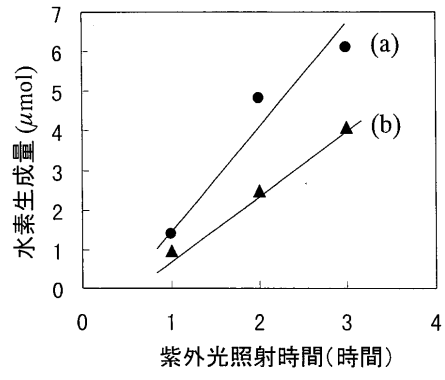
【図 1】炭化チタン（TiC）を 350 で、100 時間熱処理した後の試料（a）と純粋な TiC（b）の XRD 測定結果を示す図である。

【図 2】TiC の焼成から作製された炭素ドーブアナターゼ型 TiO<sub>2</sub>（a）と純粋なアナターゼ型 TiO<sub>2</sub>（b）の水分解実験結果を示す図である。

【 図 1 】



【 図 2 】



---

フロントページの続き

(72)発明者 崔 永樹  
群馬県高崎市綿貫町1 2 3 3番地 日本原子力研究所高崎研究所内

(72)発明者 梅林 励  
群馬県高崎市綿貫町1 2 3 3番地 日本原子力研究所高崎研究所内

(72)発明者 山本 春也  
群馬県高崎市綿貫町1 2 3 3番地 日本原子力研究所高崎研究所内

(72)発明者 田中 茂  
群馬県高崎市綿貫町1 2 3 3番地 日本原子力研究所高崎研究所内

Fターム(参考) 4G069 AA08 BA04A BA04B BA08A BA08B BA48A BB15C BC50C BD04C CC33  
DA05 EA01Y EC22X EC22Y EC25 FA01 FB30 FB40 FC02 FC06